

# 一人前レベルの国語科学習指導知識・技術 I

常木 正則\*

Knowledge and Art of Competent in Japanese Language Teaching Practice I

Masanori TSUNEKI

## 目 次

### 問題の所在

- I 研究の目標と方法
- II 知識・技術の具体例

### 資料

- 1 学習課題創りのための教材研究の実際
- 2 少人数での共学の仕方の実際
- 3 学習指導案の実際

(2008年3月21日受理)

\*新潟大学教育人間科学部国語科教育学研究室

## 問題の所在

一人前レベルの国語科学習指導の知識・技術の具体例、体系が明確ではない。そのため、教員養成段階での教育目標・内容も、現職教員の教育目標・内容、教員自らの学びの目標・内容も明確ではない。

教員養成段階の教育目標は、例えば、「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」(教育職員養成審議会・第1次答申、1997年7月)では、「教科指導、生徒指導等に関する『最小限必要な資質能力』(採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力)を身につけさせる」としている(この提言は最近の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」2006年7月、にも引き継がれている)。そのような資質能力を備えた者の養成のために、同答申では「教科指導、生徒指導等の理論及び方法に係わる知識及び技能を教授」とする。とある。

では、最小限必要な資質能力としての教科指導の理論及び方法に係わる知識、技能は明らかになっているのであろうか。同答申では、「養成段階で修得することが求められる知識、技能等の水準をどのように考えるかについては、初任者が実際に教科指導、生徒指導等に当たる場面を想定してみると理解しやすい」と言う。しかし、知識、技能の具体例、体系は示されていない。

そこで、本研究は、答申で言うように、実際に国語科学習指導に当たる場面を想定しながら、知識・技術をまずは具体的に明らかにしていく。

ところで、一人前レベルとはどのようなレベルか、ということであるが、答申で言う「教科指導の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」の次の段階のレベルを想定している。それを表現すれば、「教科指導の職務を円滑に実践できる資質能力」となる。

なお、以下に、学習指導知識・技術の習熟度レベルとおおよその経験年数との関係及びレベルアップの方法についての仮説を述べておく。

初心者レベルは1年目。新人レベルは6年目まで。一人前レベルは7年目以降。中堅レベル、達人レベル、名人レベルは7年目以降である。一人前レベルには誰もができるだけ早い年数で達しなければならない。中堅レベル以上は資質能力と研修(研究と修養)による。

一人前レベルへの早道は同一学年を3年以上継続して担当することであろう。小学校1年生担任であれば、

3年連続して担任し、まずは小学校1年生担任教師として一人前になることである。一つの学年の一つの教科の一人前になると、他の学年の他の教科の一人前になることはより早く達成できるのではないだろうか。

## I 研究の目標と方法

### 1 研究の目標

- ① 一人前レベルの国語科学習指導の知識・技術を具体的に明らかにする。
- ② 明らかにされた具体的な知識・技術の体系化を図る。ただし、その体系化は、かなりの数の具体的な知識・技術が集積されてからとなる。本稿の段階ではまだそこまで達していない。

### 2 研究の方法

- ① 一人前レベルの国語科学習指導の知識・技術を理論的に明らかにする。  
ア 先行研究、具体的には文献から探索する。  
イ 一人前レベル以上にある教員に知識・技術の具体例を聞き取る。
- ② 具体的な知識・技術が実際の授業ではどのようなになっているのかを観察により確かめる。観察対象は、教育実習生の授業、研究会等での公開授業等とする。
- ③ 知識・技術の具体的項目が10個ほど集積した段階で順次発表していく。
- ④ 知識・技術が100個ほど集積した段階で体系化を行う。

## II 知識・技術の具体例

今回発表する知識・技術の具体的項目は以下の15項目である。

- 1 校門から児童・生徒玄関までの環境整備
- 2 教室の環境整備
- 3 机・椅子の適合
- 4 適正な座位・立位
- 5 座席の配置
- 6 板書の仕方
- 7 机上の整備
- 8 鉛筆の持ち方
- 9 書く時の姿勢と紙面の位置
- 10 学習課題の創り方(読むことの学習指導の場合)
- 11 学習課題の解決過程
- 12 少人数での共学の仕方

### 13 全体での共学の仕方

- (1) 班学習の成果の共有のさせ方
- (2) 自学の成果の共有のさせ方

### 14 学習指導案の書き方

### 15 時間の管理

各項目の記載内容は以下の通り。なお、項目によっては内容の一部を欠くものがある。記載の必要がないからである。また、記載の分量も一定ではない。必要に応じての記述をしているからである。

#### 知識・技術の項目名

【どうあるべきか、その根拠は】

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

【改善の方法】

【技術習熟の方法】

【注】

【参考文献】

特に意を用いたのは「その根拠は」である。なぜそのような知識・技術が必要なのかを理解され納得されないならば、知識の獲得・定着、技術の習熟への意欲を持ち得ないからである。

## 1 校門から児童・生徒玄関までの環境整備

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・校門から児童・生徒玄関に至る校地は前庭にすべきである。
- ・校門を潜ればそこは校地である。環境として庭であることが望ましい。池があり四季折々の草花があることが望ましいから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・前庭の一部が駐車場になっている。校地に入ってから児童・生徒玄関に向かう児童・生徒の脇を車が通っている事例もある。
- ・車通勤をしている職員が駐車しているからである。

【改善の方法】

- ・校門から児童・生徒玄関に至る校地は前庭にする。池を作り樹木や草花を植え込む。登下校の折、池の魚を見たり四季折々に咲く花の名前を教え合ったりできるようにする。そうした見聞は作文の題材になったり生活科、理科等の学習材になったりする。

## 2 教室の環境整備

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・できるだけ快適な環境を整えるべきである。
- ・快適な環境が整えられると教室での生活、学習を快適に行うことができるから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・教室環境、気温、湿度、明るさ、換気、音、臭いへの配慮が不十分である。
- ・教室環境への配慮が希薄なことと、知識が不十分であるからである。

【改善の方法】

以下の知識を持ち教室環境を整える。

- ・気温(湿度)：冬期 $-19\pm 2^{\circ}\text{C}$  (40~60%)、夏期 $-22\pm 2^{\circ}\text{C}$  (45~65%)
- ・明るさ：150~300 ルクス。暗いと感じたら人工照明を使う。
- ・換気：暖房時には3~4時間おきに換気する。
- ・音：騒音の解消は難しい。暫時窓を閉めるなどできる限りの対策は取る。
- ・臭い：臭いの解消も難しい。暫時窓を閉めるなどできる限りの対策は取る。

【参考文献】

- 1) 清水康敬「教室整備の技術」坂元昂・水越敏行編『授業技術の開発2 授業実施の新技术』明治図書、1978、120頁。
- 2) 西尾和子「環境調整の看護技術」竹尾恵子監修『Latest 看護技術プラクティス』学研、2003、2-6頁。

## 3 机・椅子の適合

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・身長、座高に適合した椅子・机を用意する。又はクッションや足置きで調整させる。
- ・身長、座高に適合した机・椅子は無理がなく疲れないから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・身長・座高に適合していない机・椅子であることがある。そのため、椅子での適切な座位が取れない、また机上での無理のない活動ができない状態が生じ

ている。

・指導者も学習者もあまり机や椅子の高さに意を向け  
ないからである。

#### 【改善の方法】

・人間工学の知見を取り入れて身長、座高に適合した  
椅子・机を用意する。用意できない場合はクッション  
や足置きで調整させる。

#### 【参考文献】

1) 清水康敬「教室整備の技術」坂元昂・水越敏行編  
『授業技術の開発2 授業実施の新技术』明治図書、  
1978、117頁。

清水の見解によれば、例えば、身長160センチ、座  
高84センチでは、以下のとおり。

椅子の高さ： $160 \div 4 = 40$  センチ

机の高さ：椅子の高さ＋座高の高さ $\times 0.3 - 1 = 63$   
センチ

2) 齋藤宏、他『新版 姿勢と動作 ADLその基礎か  
ら応用』メヂカルフレンド社、2000、7頁、51頁。

### 4 適正な座位・立位

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

・座位・立位にかかわる知見による正しい椅子での座  
位そして立位を取らせるべきである。  
・座位・立位の知見に学び最も無理のない美しい姿勢  
をとらせることが望ましいから。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・身長に適合していない机・椅子であるため、椅子で  
の適切な座位が取れない、また机上での無理のない活  
動ができない状態が生じている。立位も正しくない。  
椅子での座位そして立位が正しい学習者はきわめて少  
ない。

・椅子での座位と立位の正しい在り方を指導者、学習  
者共に意識していないからである。

#### 【改善の方法】

##### 〈椅子での座位〉

・小学校低学年の教室に、座位でのエンピツの持ち  
方の写真が掲示されているのを見ることがある。その  
写真に見るような座位をとらせる。

##### 〈立位〉

・立位での教科書の持ち方の写真が掲示されている

のを見ることがある。その写真に見るような立位をと  
らせる。

#### 【参考文献】

1) 寺田清一編『新版 立腰教育入門』不尽叢書刊行  
会、1985。

2) 寺田清一編集『元気いっぱい立腰の子ら』不尽叢  
書刊行会、1999。

3) 若林虎三郎・白井毅編纂『改正教授術 巻一』1883  
(明治16年)、明治初期教育希観書集成、唐沢富太郎  
編集、第1輯5 雄松堂書店、1980。

座位・立位に関する提言の一部を引く(旧字体は新  
字体に改めた)

##### 着座ハ体勢

(一) 両足ヲ六十度ノ角ニ為シ床上ニ静止スベシ

(二) 背ノ下部ヲ僅ニ椅子ノ後部ニ接シ成ルベク  
ダケ後方ニ座スベシ

(三) 膝ヲ殆ド直角ニ屈スベシ

##### 直立ノ体勢

(十四) 全体ノ形ハ耳、肩、臍、膝、踝ヲシテ一  
直線ナラシムベシ

### 5 座席の配置

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

・学習活動の内容に適した座席配置を取るべきである。  
・学習活動にふさわしい座席配置があるからである。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・常態は正面黒板に向かった一方形の座席配置を取っ  
ている。時々、コの字型、4～6人程度の机を寄せ合  
つての座席配置が取られている。

・座席配置はこういうものだ、という固定観念がある  
からではないか。

#### 【改善の方法】

・学習活動にふさわしい座席配置をとらせる。例えば、  
自学では、教室の四方の壁に向かって座らせる。全体  
の共学では、物理的に可能であるなら、円形、楕円形、  
馬蹄形の座席配置にする。少人数での共学では、

2人の場合：一つの机で、など

3人の場合：星座型、風車型、など

4人の場合：前の2人が後ろ向きになって、囲炉裏  
型、など

5人の場合：漢字の凸型、など

※6人班は40人学級では採用しない。班員間の距離が1メートル以上離れ、話し合いの声も大きくなり、他班に影響するから。しかし、24人程度であれば、6人班でも、できるだけ班間を空けて座らせれば班相互の影響は少ない。また、机を4つにして、6人がその周りに着席することでもよい。

#### 【参考文献】

- 1) 齋藤孝『コミュニケーション力』岩波新書、2004。  
氏はポジショニング(座席配置)という言葉を用い、「ポジショニングは、コミュニケーションの質を決定する大きな要因だ。どこでもポジショニングを自在に組み替えるセンスが、コミュニケーション力の重要な一部を占める。」(99頁)と述べ、さらに、「私の経験では、場の組み替えを積極的に行う人は非常にまれである。」(100頁)と述べている。
- 2) 澤本和子『子どもの発達と教育3 学びをひらくレトリック—学習環境としての教師』金子書房、1996。  
氏は、「教卓も含む机の配置や、教師の立つ位置を含む工夫」を「空間使用のレトリック」と称している(77頁)。「ふだんからいろいろな使い方をしていれば、子どもの方から〇〇の勉強のときは机をこういう向きにしたい、という要望が出るようになる。いろいろ経験させて、子どものレパートリーを広げ、この学習ではこの配置が適当という判断力を養う」(77頁)と提言している。
- 3) 向山洋一『教育新書1 授業の腕をあげる法則』明治図書、1985。  
授業の原則十カ条の内の「第五条＝所持物の原則 子どもを活動させるためには、場所と時間と物を与えよ。」に、「教室での机の配置の基本パターンが「一斉授業用、給食用、学級会用」の三パターンしかないのでは、話にならない。／授業をするときの基本パターンを、六種は使いこなし、十種ぐらいは準備しておくようにしたい。」(36-37頁)と言っている。

### 6 板書の仕方

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

- ・学習者全員に板書過程が見えるように書くべきである。腕をのばして書く。しゃがんで書く。チョークの先端をもち黒板に刻みこむように書く。板書は縦書きでは上から下へ、横書きでは左から右へと一方向で消す。
- ・語句・文を書く実際、ひらがな・カタカナ・漢字の

字形・筆順の実際を見せるため、丁寧に書くことを具体的に示すため、きれいに美しく拭き取るためである。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・黒板と体を平行にして臂を曲げて書いているため、大方の学習者は板書過程を見ることが出来ない。黒板をなでるように書いている。上下、左右を繰り返して拭いている。
- ・望ましい板書の仕方、チョークの持ち方、書き方、消し方の知識を持っていないためである。板書過程を見せることの価値、意義に気づいていないからである。

#### 【改善の方法】

- ・学習者全員に板書過程が見えるように、腕を伸ばして書く、しゃがんで書く。また、適正なチョークの持ち方、書き方、消し方をする。

#### 【技術習熟の方法】

- ・意識して板書することを積み重ねることで習熟する。

#### 【参考文献】

- 1) 常木正則「板書」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典第三版』教育出版、2004、224-225頁。  
用語「板書」の辞典的な解説をしている。脚注に次に紹介する文献からの「手をのばして書く、しゃがんで書く」にかかわる引用文がある。
- 2) 国分一太郎「教育遺産をうけつぐために」『国分一太郎文集1 新しくすること 豊かにすること』新評論、1984(初出は1959)。

板書体勢のエピソードが次のように紹介されている。

「ある老教師は、黒板に文字を書くとき、自分のせなかで、その文字をかくすことのないように、まるでカメの子のようにちぢこまり、その手だけをうんと伸ばして文字を書く。またある教師は、生徒の方に自分の正面を向けながら、生徒全体を見わたしつつ、その注意を喚起した状態で、チョークの先をもちながら、からだを右の方にうんとよせるようにして、右手をぐっとのばして、その文字を書きつける。(中略)これはいずれも、すべての子どもの注意を集中させるためにくふうされた教師の身のこなしである。配慮である。」

- 3) 加藤末吉『教壇上の教師』良明堂書店、1908。

黒板の使用上の注意事項が7点挙げられている。そのうちの 하나가、「教師が板書する際の位置について」である。それについては、「教師は、どこまでも、学習者の便益を講ぜんがために、一字を書するに随って、

一字を児童に示さん様に、黒板に近づけながら、左傍又は右傍にかたよせ、猿臂（勢いよく長く腕をのばして、物をとるときの腕のこと―常木注）を延ばして書くのがよい。」（114―115 頁）と述べ、その便宜にも言及している。

## 7 机上の整備

### 【どうあるべきか、その根拠は】

- ・学習活動の内容に適した机上の整備をさせるべきである。
- ・学習活動にふさわしい机上整備がなされることで、より効率的な学習活動を行うことができるから。

### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・不必要な用具等が机上に置かれている。低学年では机からものが落下することがよくある。
- ・あまりそのことへの意識が向けられていないから。

### 【改善の方法】

- ・学習活動に必要なものだけにさせる。筆記用具等の入った入れ物も机上には置かせないようにする。原則的には、教科書、ノート、筆記用具（黒鉛筆1本、赤、青鉛筆各1本）とする。

### 【参考文献】

- ・大西忠治『授業づくり上達法』民衆社、1987。  
氏は、授業における小さな「取り決め」の一つに、「机上のものの置き方は、とくに理由がないかぎり、ノートを右側に、教科書を左側に置き、中央にエンピツを2本以上置くこと。／エンピツは、黒と赤（ボールペンでもいい）を一本はかならず持っていること。」（180 頁）を挙げている。

## 8 鉛筆の持ち方

### 【どうあるべきか、その根拠は】

- ・書き方（書写）の教科書や正面の壁面に掲示されている鉛筆の持ち方の写真のように持たせるべきである。
- ・疲れず速く字形を整えて書くことができるからである。

### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・正常な持ち方をしている学習者は極めて少ない。
- ・小学校の1年生でわずかばかりの指導を行い、それ

以降はその学習指導をしていないからである。書字後の字形は注意するが、筆記道具の持ち方には注意が向けられないからである。また、横書き、シャープペンシルの使用が原因である。

### 【改善の方法】

- ・写真に示されている持ち方をさせる。鉛筆は2B鉛筆とする。握る強さは「上部をつまんで引っぱったら、エンピツがスルリと抜けるぐらい」<sup>1)</sup>とする。

文章の学習で、この鉛筆の持ち方で、その文章を少しずつ短時間（3～5分）視写させることを続ける。

### 【注】

- 1) この知見は、小川利雄『国語教育実践技術の開発』（渓水社、1987）から得た。氏は、鉛筆の持ち方に関連して次のような見解を示している。「私は、今日の教育の荒廃の根源は、エンピツをキチンと持って、文字を正しく書くという、ことば生活にとっての基本的なことがらが欠如している、あるいはこういう教育がなおざりにされていることにあるとさえ思っているのです。」（137 頁）。

### 【参考文献】

- 1) 岸本裕史『どの子も伸びる国語力』小学館、2003。  
氏は、正しい鉛筆の持ち方の写真を示して、「親指も人差し指も、曲げ方は槍ヶ岳状ではなく、ゆるやかな富士山型に曲げます。親指と人差し指で、福島県にある猪苗代湖型に囲む、と覚えておいてください。鉛筆の先は左斜め前に傾けます。そのときの角度は60度です。鉛筆をこのように持てば、力を入れなくてもすらすらと書くことができます。長い時間、文字を書いても一向に疲れず、しかも速く書くことができるので、とても楽です。もちろん、美しい文字が書けるようになります。／また、子どもの鉛筆は、HかHBではなく、2Bがよい。2Bの鉛筆はやわらかいので滑らかに書けますし、黒が濃いので文字も見やすく、目も疲れません。／正しい姿勢と正しい鉛筆の持ち方は、これから子どもが学習に取り組み、学力を向上させていくにあたって、欠かすことのできない重要なしつけです。しっかりと身につけておいてください。慣れるのに100日はかかります」（48 頁）。と述べている。
- 2) 山根一眞『変体少女文字の研究』講談社、1986。  
氏は、字形を問題にしている。変体少女文字（丸みを帯びた癖のある字体の文字のこと―常木注）が出現

した時期、その原因を明らかにしている。誕生は昭和49年、53年普及開始とのことである。その原因は、早書き、横書き、シャープペンシルであるとしている。53年以降シャープペンシルが猛然と普及したとのことである。

3) 石川九楊『日本語の手ざわり』新潮選書、2005。

氏は、筆記具の奇妙な持ち方を問題にしている。奇妙な持ち方をするようになった原因はシャープペンシルの使用にあるとしている(133-139頁)。

## 9 書く時の姿勢と紙面の位置

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・姿勢を正しくして、書字の箇所と目の距離が30cmほどとなるようにする。
- ・姿勢を正しくすることは基本であり、30cmほど離すことで目の疲労度を最も軽減できるからである。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・極端な例では、目と書字箇所との距離が10センチほどである。適正な姿勢で書字している学習者はきわめて希である。ノートや用紙の位置への配慮がない。
- ・指導していないからである。学習者任せにしているからである。

【改善の方法】

- ア 適正な座位を取らせ姿勢を正しくさせる。
- イ 左右の前腕が机上に載るようにさせる。
- ウ 書字する部分が鉛筆の先に来るように紙面を前後左右に動かさせる。
- エ 左手(右利きの場合)は紙面の左手前に出し紙面を軽く押さえさせる。

【参考文献】

1) 藤原宏・細矢肇編『書写指導の理論と実践』明治図書、1968。

「技能の育成を目指す学習指導には、必ずそれにおける姿勢のあり方が大切である。」と言い、姿勢・執筆のあり方を説明している(72-74頁)。

2) 小川利雄『国語教育実践技術の開発』溪水社、1987。

姿勢と紙面にかかわる知見をこの書から得た。140-145頁。

## 10 学習課題の創り方(読むこと学習指導の場合)

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・その学習課題の遂行が読む力を育成することに寄与していると判断できるものとする。また、課題の提示は明確なもので、どういう課題なのか学習者に理解され頭を働かせるものでなければならない。
- ・読むことの学習指導の目標は読む力を育成することにあるから。課題が明確で学習者に理解されないと学習活動に混乱が生じるから。頭を働かせる課題でないとやる気が起きないから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・確認型学習課題・奇問型学習課題が多い。課題の明確さについては、不明確であることがある。そのため、活動開始直後や途中で質問が出て、活動を中止させ課題の確認をさせる、というようなことが多く見られる。
- ・誰もが認める学習課題の作り方の方法がないからである。学習課題を明確に言葉で書いていないことと指導者が自らやってみないままに学習者に課すためである。

【改善の方法】

- ・いろいろな人が学習課題の作り方を提唱している。それを参考にする。ある方法に納得したならその方法で創ればよい。

筆者の方法を紹介する。具体的事例を学習材「空中ブランコ乗りのキキ」(別役実)で示した。資料1参照。

教材研究過程で学習課題の候補を見出していく。教材研究の目標は学習課題を見出すことである。

教材研究の方法は、

- ① どんな話か、題材・主題を求めながら読む。
- ② 題材・主題を20字程度に書く。
- ③ 感想を箇条書きで書く。
- ④ 題材・主題・感想を念頭において、各段落の要点を20字程度でまとめていく。
- ⑤ ④の仕事の過程で、気づいたことはなんでも色鉛筆など各種筆記道具を使って書き込んでいく。学習課題の候補を求めながら仕事を進めていく。題材・主題の把握に修正があれば行う。
- ⑥ 学習課題の候補を以下の観点から検討し決定する。
  - ア 学習課題と解を児童・生徒の学力のレベルで書いてみて、課題に即応した解が書けるか。
  - イ 読むことの力の育成に寄与する課題か。

ウ 難易度は適切か。

- ⑦ 学習課題を20字前後で書く。20字を超えるような場合は、2文、3文で表現する。文間の論理を明確にする。

※①～⑦の過程で、先行教材研究、学習指導案等に提示されている学習課題を検討し、適切なものを取り入れる。

ア 教科書会社発行の各種「学習指導書」

イ 各種先行研究

#### 【技術習熟の方法】

例えば、前述の常木の方法を取るとすれば、その方法を用いた学習課題作りを異なった文章で意識的に100回は繰り返す。

#### 【参考文献】

・発問上達法とか発問づくりとかの言葉の入った参考文献はかなりある。求めればすぐに何点かの文献を手にすることができるであろう。

### 11 学習課題の解決過程

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

- ・学習者の学び合いにより課題解決を図らせるべきである。
- ・教室は学び合いの場であるから。共学力も必要。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・班での自他の自学の検討が十分に行われていない。全体での解の検討では、一部の学習者のみの自学がとりあげられている。
- ・学習課題の解決過程はどのようにすることが望ましいのか、解決過程の型作りが意識的になされていないことによるのであろう。

#### 【改善の方法】

- ・最も丁寧な展開は以下のようになる。
  - ① 自学により解をまとめさせる。
  - ② 解のまとめの言葉はノートに中央部に書かせる。
  - ③ 少人数による自学の紹介を行わせる。学友の解はノートの四方に記入させる<sup>1)</sup>。
  - ④ 自学と学友の解を比較検討させ自学を確認または修正する。
  - ⑤ 自学を紹介し合い吟味検討させ課題に合った解をまとめさせる。

- ⑥ 班の解を全体の人に報告させる。教室の前面に出て報告させる。解の質量に応じていずれかの仕方を取る。

ア 口頭で報告し聞き取らせる。

イ 口頭で報告し聞き取らせ、要点を書き取らせる。

ウ 聴写できる速さで報告させ、聞き手に書き取らせる。

エ 解を板書させる。

オ 解を板書させ、他の学習者には視写させる。

上記の仕方の内で、推奨する仕方はウとオである。理由は学習者にもっとも多くの労力を強いるからである。学習指導では学習者がもっとも学習するようにしなければならないからである。

- ⑦ 他班の解は、自学の班内検討のときのノートの取り方と同様、自班の解を中央に書き、他班の解をノートの四方に書き込ませる。

- ⑧ 自学で自班と他班の解の比較検討をさせ課題に合った解をまとめさせる。

- ⑨ 全体で場で討論し最も適切な解を得させる。

#### 【注】

1) この知見は、学部授業での模擬授業を指導する過程及び二宮直輝氏との対話の過程で得た。どなたかが問題に取り上げこの知見を提示しているであろうが、筆者は今のところ接していない。

### 12 少人数での共学の仕方

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

・どのように共学を進めるのか共学の展開の仕方を理解させ、学習課題の解を班員全員が持ってから共学に入らせる。

・誰が進行役をするのか、どのように解を紹介し合い相互の解を検討するのかが分かっていないと充実した共学は成立しないから。各人が解を持っていないければ、相互の解の検討ができないから。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・自学が十分行われないうちに共学をさせている。また、どのように自学を紹介し合い検討し、よりよい解を見出していくかの手順が理解されていないままに共学に入らせている。そのため、質の高い共学が成立していない。

・指導者が時間に追われ、先に急ごうとするからであ



る。共学の進め方を教え理解させていないからである。

#### 【改善の方法】

・学習課題の解を全員がまとめた段階で共学に入らせる。ただし、解をまとめる活動には遅速が生じるから、決められた時間が来た段階で共学に入らせる。まだ解がまとまっていない学習者には、学友の解の検討に積極的にかかわることと、次回には決められた時間内で課題をやり遂げるよう励ます。

・共学の進め方を示し理解させてから共学に入らせる。

進め方の例（4人班A・B・C・Dさんの場合）

ア ノートの中央に学習課題と自学の解を書き込む。

そこから、放射線状に班員の解を書き込ませ、自他の解の相互検討を行わせ、よりの確な解を得させる。具体的事例を学習材「空中ブランコ乗りのキキ」（別役実）の場合で示した。資料2参照。

イ 司会進行役を決める（輪番制とする）。Aさんとする。

ウ 時計回りで、まずBさんに解を報告させ、Aさんの司会の下でCさん、Dさん、Aさんの順で、自分の解と比較しながらBさんの解を検討し意見を述べる。

エ 一通り検討が終わったら、Cさんの解の検討に移る。このようにして順次Dさん、Aさんの解の検討を行う。

オ 全員の解の検討が終わったら、学習課題の解として最もふさわしいものを決める。それを班でまとめた解とする。

### 13 全体での共学の仕方

#### （1）班学習の成果の共有させ方

【どうあるべきか、その根拠は】

・班で得られた共通の解は、全体の場合に紹介させるべきである。  
・班での学習の成果を班内に止めておく理由はないからである。すべての班が、学習課題に取り組み共通の解を出している。その解が適切なかどうかを全体の場合で検討させることが望ましいから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・一部の班に口頭で報告させている。  
・全班に報告させると時間がかかる。口頭発表以外の方法では時間がかかる。同じような解が続くと活動が

だれる。そこで、いくつかの班に報告させている。

#### 【改善の方法】

・単元での学習課題を精選し、このような学習は1つか2つにする。

・ノートの中央に学習課題と自班の解を書き込む。そこから、放射線状に各班の解を書き込ませ、自他の班の解の相互検討を行わせ、よりの確な解を得させる。

各班の解の発表のさせ方として、以下の2つを推奨する。

ア 前に出させて、語句、文単位でゆっくり口頭発表させ聴写させる。

イ 解を板書させ、視写させる。

・各班の解を比較検討させる。検討の仕方は、10班10通りの解があれば、二つずつ比較検討し、より適切な解を求めていく。まず、Aという解とBという解を比較検討させ、「AとBはほぼ同じ解だから一つにまとめられる」とか、「Aの方が適切である。なぜなら・・・だから」ということでAが適切との納得が得られたなら、次にAとCとの比較検討をさせる。こうして、順次比較検討させてより適切な解を求めさせる。

なぜ、このようにさせるかというと、10個の解をあっちの解、こっちの解という風にばらばらに検討させると、話し合いがあちらこちらに飛び交い収拾がつかなくなるからである。

#### （2）自学の成果の共有のさせ方

【どうあるべきか、その根拠は】

・自学の報告は、学級の成員に向かってさせるべきである。正面黒板に向かった一方形、コの字型の着席形態を取っている場合は、報告者を正面黒板前に出させて行わせる。

・説明・報告を学友にする場合には、学友を見渡せる場で行わせることが適当であるから。また、聞き手も話し手を見ながら聞くことが話し合いの常識であるから。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・大方は自席で、指導者に向けて報告している。大方の聞き手は、話し手に視線を向けていない。視線を向けるため体の向きを変えろということも少ない。指導者に視線を向け、指導者が報告をどのように受け止めているか観察している。

・学習者の話を指導者が一番傾聴しており、うなずい

たり、問い返したり、話し手の言いたいことを整理し補足したりしているからである。学友に傾聴を促し、体の向きを変えて話し手の方をみるよう指導していないからである。

#### 【改善の方法】

・着席が円形の場合は自席で、正面黒板に向かった一方形、コの字形の着席では、正面黒板前に出させて行わせる。

・1学級の児童・生徒数が30人以下である場合では、円形の着席が可能である。

#### 【参考文献】

1) 服部潔「教師の個性・教師のしごと」、服部潔・家本芳郎『教師にいま何が問われているか』高文研、1982。氏は以下の見解を示している。

「これはいま私の学校で実際に行なっているのですが、子どもが指名されて答えるときには、必ず全員がその子の方をパッと注目するようにしむけています。友だちの質問に答える場合は、自分は誰に向かって答えるのかをはっきりさせて、その子に向かっていうようにさせています。だから、めざす相手の子がこちらを向いていないときには、「わたしは〇〇君の質問に答えます」と呼びかけて、その子はこちらを向いたところで、答えさせるようにしているわけです。そのときの顔が美しい。／では、こういうことをなぜ始めたかといいますと、いままで私もそうだったのですが、子どもを指名したあと、すべて教師に向かっていわせるようにしていました。ほかの子も全員、教師の方を注目しているのです。そして、これが集中度の高い授業だと思っていました。しかし、よく考えてみると、これはうそです。集中度の高さというのは、そんなものではない。ちがうのではないか、そう思ったのです(32－33頁)。

3) 林竹二「公開研究会にのぞむこと―宮城教育大学附属小学校・養護学校公開研究会に寄せて―」『教えるということ』現代教育101選2、国土社、1990。

氏は、「授業にとって、子どもたちの無言の参加が大切であることはいままでもない。他の子どもが語っていることを、言葉にならないでいる思いまでふくめて、注意ぶかく聞き取る子どもの姿勢や能力を育てていなければ授業はゆたかなものにならない。」(181－182頁)と述べている。

## 14 学習指導案の書き方

#### 【どうあるべきか、その根拠は】

・単元全体の案が書かれるべきである。  
・単元は学習指導・学習の一つのまとまりであるからである。

#### 【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

・本時中心の学習指導案となっている。  
・1単位時間の公開授業用として案を立てているからである。参観者のいる本時をどのように展開するかに腐心するからである。本時さえ順調に展開できればいいと思っているから、本時までの展開は本時が計画通り展開できるよう準備を整える。また、本時さえ終われば、あとは適当に従来どおりにとっているからである。

単元全体の計画を立てることが大変難しいからである。なぜ難しいかというと、目標論、内容論、学習指導論がはっきりしていないからである。そのため、論の具体化である学習指導案作成が難しくなるのである。筆者は、目標論、内容論、学習指導論に迷いながらも、一単位時間当たりの作成所要時間は約2時間である。5単位時間であれば約10時間である。

「資料3」として載せた「単元名 作品理解を深めることで作品感受力を高めよう。―学習材 別役実『空中ブランコ乗りのキキ』(三省堂版中学校国語教科書1年)」では、14時間ほどかかっている。文学的な文章の学習指導はどうあればよいのか、迷いながら作成しているから時間がかかったのである。

#### 【改善の方法】

・これまでどのような考え方で学習指導を行ってきたのか、単元全体の学習指導の基本的な考え方を述べ(目標論、内容論、学習指導法論)、学習指導の展開過程を概括文<sup>1)</sup>と児童・生徒に実際に語りかける言葉で書いてみるとよい。その際に、これまでの学習指導の実際を振り返って改善点を明らかにし、それを織り込んだ計画を立てるようにすると一層よい。

#### 【注】

1) 「概括文」という名称は、上條晴夫『図解よくわかる授業上達法』(学陽書房、2007)から得た(43頁)。

#### 【参考文献】

1) 大西忠治『発問上達法』民衆社、1988。

氏は「時には考えぬかれた教案を書いてみる」ことを提言し、次のように述べている。「年に一度や二度、とくに若いうちに、一カ月くらい考えぬいた教案を書き、それをもとにした授業をやるのがぜひとも必要なのである。一時間か二時間でいい、あるいは、ある一まとまりの単元、教材についてでいい。」(184 頁)。また、「一時間の完全な指導言のすべてを、計画して授業にのぞむこと」(188 頁)を提言している。

1 時間、2 時間では十分ではない。単元、教材の全時間の学習指導計画を立てるべきである。

2) 鈴木義昭『教員改革 「問題教員」と呼ばれる彼らと過ごした三年間』東洋出版、2006。

氏は、教員研修のやり方を述べる中で、「一般の教員が通常行っている授業と準備に何日間もかけ、学習指導案を作成して臨む研究授業とを比べてみると、一流料亭の会席料理と家庭で食べる食事のような関係にあると思います。」(66 頁) と言い、「通常の形に近い状態で受講者の資質・能力を見る」(66 頁)研修を計画したとのことである。この考え方を支持する。まずはこれまでにしてきたことを振り返って単元全体の学習指導の実際を再現し、検討を加えて、改善点を織り込んだ単元全体の計画を立てればよいのである。

## 15 時間の管理

【どうあるべきか、その根拠は】

- ・最初に示した時間を守るべきである。
- ・最初に指示した活動時間を守らないと、マイペースで進めても指導者が時間を延長してくれることを学習

者は学習し、時間と活動の関係に緊張感が薄れるからである。

【実態はどうか、なぜそのような事態が生じているか】

- ・最初に指示した時間 10 分とか 15 分を 1.5 倍ほどに延長することがある。
- ・決められた時間内で課題を遂行させるということを普段指導していないからである。また、活動時間の計画がいい加減であるからである。

【改善の方法】

ア まず指導者が学習者のレベルを想定して課題に取り組み所要時間の目安を得る。

イ 所要時間にプラス 2 割の時間増をして活動時間を示す。10 分であれば 12 分にする。2 割り増しの確かな根拠はないが、それくらいの余裕を持たせるのである。

ウ 決められた時間内で終わらせる活動能力が大切であることを言い、時間との戦いの中で課題に取り組ませる。

エ 時間内に終わらなかった学習者への対処は、課題ごとに考える。例えば、「全文を初めて通読して、感想を箇条書きでまとめる」という課題では、全文を読み終わらなければ感想をまとめることができない。この場合では、読み終わったところから指導者が読んで聞かせる。そうすることで、全員が全文通読したことになる。

オ 決められた時間内で終わらせる事の大切さと、終わらなかった学習者には、そこまでできたことほめ、次回はさらに早くできるよう鼓舞する。

資料1 「学習課題創りのための教材研究の実践」

空がくく乗りのキキ	別役実	名前 常木 正則
題材・おはあてから乗 なもって四回宙返りを 行方不明がきだがその 方不明がきだがその 方不明がきだがその	通読 8:40 作業時間 3時間	1. いはんと受はキキ。
主題・死ぬかとも 人気があつてつづいた いつ心理を描く。	空がくく 乗るキキ	2. 剣になるのは相手。
	いつも幸福 あんな...	3. 人は三回宙返りを見る ためにやうきた。
	そのまへ 必死に配はる	4. 四回宙返りをしてみればい。 できませんよ。無理。
		5. いつも幸福。人が始め たことあると、それとだけ 必死に配になる。
		6. 何かが練習してめるが者。
	人気があ ると	7. 人は練習してまう。 人気があると、それとだけ 必死に配になる。
		8. ある池時にやうきに受ると。
	3回の三回 返り	9. おはあてとの全話。
		10. 3回の三回返りなが りの全話



資料2 「少人数での共学の仕方の実際」

T・I

きれいだね、消え  
しやうが、シャボン玉は  
このシャボン玉の特殊な  
キキが消えしやうた、それが  
分る。  
シャボン玉のキキが重なり  
描かれる。

学習課題

おばあさんが吹いたシャボン玉には  
重要な意味がある。その意味をまよわす。

M・T

四回留返は、シャボン玉のふたつだ、というところ  
意味がある。シャボン玉は天上へのぼる。しかし、  
すぐ消えしやう。四回留返も、おばあさんは消えしやう。  
おばあさん、ふたつに消えしやう、おばあさんはシャボン玉の  
旅のふたつだ。

E・U

シャボン玉は、おばあさんの  
きれいなあからなる。  
おばあさんのあからなる。  
シャボン玉は、おばあさんのあからなる。  
しかし、おばあさんは、おばあさんの  
運命がある。  
消えしやう、おばあさんの  
運命がある。

N・N

おばあさんが吹いたシャボン玉の重要な意味は、シャボン玉が  
キキを描いているというところ。  
シャボン玉の性質をイメージ、本文から探した四回留返についての  
情報を比較すると、二つは同じ性質を描いていることがわかる。  
また、本文からおばあさんの情報を考察すると、「人が分らない  
ことが分る」という性質が設定されている。  
このことから、シャボン玉を、おばあさんが吹いているというには、  
おばあさんがキキの運命を予言しているという読み方ができるのだ。

### 資料3「学習指導案の実例」

## 第1学年 国語科学習指導案

作成日 平成20年2月21日

平成20年3月5日修正

作成者 常木 正則

### 1 単元名 作品理解を深めることで作品感受力を高めよう。

ー学習材 別役 実「空中ブランコ乗りのキキ」(三省堂版中学校国語教科書1年)

### 2 学力・学習活動力の実態(生徒数40名)

中学に入学後、文章を読むことの学習を5回行っている。「クジラの飲み水」「アイスクャンディー売り」「食感のオノマトペ」「わたしたちと古典 かぐや姫の物語」「矛盾」である。学習の進め方はほぼ同じである。自学力、共学力はかなりついている。

3回目の単元「食感のオノマトペ」からは、題材、主題・要旨、あらすじ、段落の要約、構成・場面の展開、心情把握、漢字の読み方、語句の意味、表現の吟味、などは、すべて文章理解の基礎作業として自学による取組とした。要求する学習活動の遂行がほとんどできない生徒が2人いる。学習塾に行っている生徒はいない。

### 3 学習指導の基本的な考え方

ア ほぼ同様の自学、共学を繰り返させることで、自学力、共学力を育成する。

イ 自ら精読の課題を設定し追究できる自学力を育成する。

ウ 自学による成果を学友の自学の成果と比較検討を行う場を設定する。

エ 学習課題の解決過程は、概ね以下のとおりである。

① 自学により解をまとめさせる。

※自学の時間を保障する。

② 解の言葉はノートの中央部に書かせる。

③ 班で自学の紹介を行わせる。学友の解はノートの四方に記入させる。

④ 自学と学友の解を比較検討させ自学を確認または修正する。

※自学の時間を保障する。

⑤ 自学を紹介し合い吟味検討させ課題に合った解をまとめさせる。

※共学の時間を保障する。

⑥ 班の解を全体の場に報告させる。教室の前面に出て報告させる。報告は解の質量に応じて下記のいずれかの仕方を取る。

a 口頭で報告し聞き取らせる。

b 口頭で報告し聞き取らせ、要点を書き取らせる。

c 聴写できる速さで報告させ、書き取らせる。

d 解を板書させる。

e 解を板書させ、視写させる。

※上記の仕方の中で、推奨する仕方はcとeである。理由は学習者にもっとも多く労力を強いるからである。

⑦ 他班の解は、自学の班内検討のときのノートの取り方と同様、自班の解を中央に書き、他班の解をノートの四方八方に書き込ませる。

⑧ 自学で自班と他班の解の比較検討をさせ課題に合った解をまとめさせる。

※自学の時間を保証する。

⑨ 全体場で討論し最も適切な解を得させる。

※座席配置をコの字型にする。

⑩ 指導者が解のまとめを行う。

オ 通読時間が10分以内であることから、毎時間1回は作品の通読を行わせる。調べるために読む、分かったことを基に読む活動を繰り返させる。

カ 学力、学習活動力が著しく低い学習者が2名いる。隣に座っている学習者と班長にどのように対応したらよいのかを伝えておく。しかし、本学習指導案では個別の学習指導の計画はしていない。

#### 4 単元目標

ア 事柄や事物などの意味を追究することで作品をよりよく理解できる。

イ 表現に着目できる。

#### 5 各時の展開(全7時間)

次・時	主なねらい(国語の力)	時間	主な学習指導／※指導上の留意点	評価の対象と方法
1 2 3	1 指導者の話に耳を傾けて聞く力。	5	1 作品紹介と学習の進め方の説明を行う。 「空中ブランコ乗りのキキ」の学習を始めます。この作品は今から30年ほど前、NHKの幼児番組「おはなしこんにちは」で放送されたものです。それが本になっています。これです。しばらく絶版でしたが、一昨年の秋に文庫本になって再刊されました。きっと再刊を望む読者が多かったのでしょう。これです。「空中ブランコ乗りのキキ」は事情があって載っていません。22 編載っています。図書館に10冊入れましたので、手にとって見てください。 さて、これまでに、読むことの学習を5回しました。今回は6回目です。今回の学習の進め方はこれまでとほぼ同じです。 今回も、学習課題作りにがんばってください。私はすでに作ってあります。みんなからどんな学習課題が出てくるか楽しみです。	1 聞く態度、座位を観察により。
	2 どんな話なのかを求めて読み通す力。	10	2 どんな話なのか求めて通読させる。 それでは、まずはどんな話なのかを求めて1回読んでください。時間は9分とします。 いつものように、美しい姿勢、美しい教科書の持ち方で読んでください。	2 読む姿の観察により。
	3 どんな話なのかと漢字の読み方を確かめながら一人1文交替読みをする力。	10	3 どんな話なのかと漢字の読み方を確かめながらの、一人1文読みをさせる。 どんな話なのかと漢字の読み方を確かめながらの、一人1文読みをします。始めてください。	3 読む姿と読みぶりの観察により。
	4 題材、主題、場面の	125	4 題材、主題、場面の展開、言葉の意味、思考、	4 机間をま



	展開、言葉の意味、思考、行為、心情、表現、などを把握し理解する力。 感想をまとめる力。 学習課題を創る力。		行為、心情、表現、などを把握し理解させる。感想をまとめさせる。学習課題創りをさせる。 それでは、いつものように作品構造表の作成に取り掛かってください。今日とあと2時間取ります。終わらない人は4時間目の始めまでに家庭学習でやってください。 ※分からないことがあれば班内の人に尋ねさせる。解決できなければ指導者に問わせる。 ※自学ができない2人には異なった指導を行う。具体的な指導は略。	わりながら活動の観察により。
4	5 音読力。 自学を紹介する力。 学友の紹介を理解する力。自学を比較検討する力。	30	5 班長の指示で場面交替読みをし、基礎学習のうち、題材、主題、感想を紹介し合わせる。 班内で場面交替読みをするように。場面分けは班長の分け方で行ってください。そのあと、いつものように、題材、主題、感想を紹介し合ってください。修正があれば色鉛筆で書き込むのでしたね。座席は前の人が後ろ向きになって行います。時間は30分です。はじめてください。	5 声に出して読んでいる姿、班活動の観察により。
	6 自学を検討する力。	10	6 指導者の仕事と照らし合わせて自学を検討させる。 いつものように私の作品構造表のコピーを渡します。自学と照らし合わせ、比較検討してください。 ※作品構造表には、題材、主題、感想、場面分け、段落の要約が書き込まれている。指導者の教材研究を利用する。	6 活動の観察により。
	7 視写力。	10	7 指導者からの学習課題2つに取り組ませる。 学習課題を2つ出します。板書します。課題をいつものようにノートに書いてください。 【板書】 課題1 おばあさんが吹いていたシャボン玉には重要な意味がこめられている。その意味をまとめよ。 ※まとめ文はいつものように、短い文を積み重ねるように。  課題2 人物の行動（会話を含む）が最も詳しく書かれている箇所を2箇所指摘せよ。解は、例えば「キキが食事をしている場面」というように文末を「場面」とすること。指摘した後は、そのうちの1箇所を丁寧に視写しなさい。 〈解〉・キキとおばあさんが会話をしている場面	7 視写活動の観察により。

5	8 課題の解を求めて読む力。	10	<p>・キキの四回宙返りの場面</p> <p>8 課題を意識して読ませる。 前回に出した課題を確認します。・・・という課題でした。それでは課題を解くために読みます。今日は3班と5班の8人に代表して読んでもらいます。場面分けは私のものにします。ちょうど8つの場面に分けています。教科書に縦線を入れてください。 それでは、3班5班の人前に出てきてください。聞いている人は聞き読みとします。読んでください。 ※立位、教科書の持ち方に留意させる。</p>	8 音読活動、聞き読みの活動の観察により。
	9 事物の意味を理解する力。 表現に注目する力。	25	<p>9 課題に取り組ませ、自学を検討させる。 まず課題に取り組んでください。班内の人が終わったら、ノートをまわし、自学を書き込んでください。学友の自学と比べて自学を検討し適切な解をまとめてください。そこまでを、30分とります。</p>	9 活動の観察により。
	10 適切な解を検討しあう力。	15	<p>10 班内で適切な解をまとめさせる。 班内でもっとも適切な解をまとめてください。まず課題の2の方からはじめてください。こちらはすぐにまとまると思います。</p>	10 活動の観察により。
6	11 課題の解を求めて読む力。	10	<p>11 課題を意識して読ませる。 課題と班でまとめた解を意識して作品を読みます。今日は、7班と9班にお願いします。それでは、7班9班の人前に出てきてください。聞いている人は読む人の表情を見ながらきくことにします。読んでください。</p>	11 活動の観察により。
	12 視写力。 検討力。	25	<p>12 課題の解を検討させる。 課題2の解は、私が言います。・・・となります。どのように表現されているか注意しながら読み特徴をつかめるようになるといいですね。 さて、課題の1です。これについては、2、4、6、8班のまとめを黒板に書いてもらいます。他の人は視写し自班のものと比較検討しなさい。時間は20分です。</p>	12 視写活動、検討活動の観察により。
	13 自分の意見を述べる力。	15	<p>13 自由討論させる。 どれがもっとも適切な解であるか、意見を交換します。始め。</p>	13 活動の観察により。

7	14 よい学習課題はどのようなものか判断する力。	30	<p>※座席配置はコの字型。</p> <p>ここで討論を打ち切ります。これまでの討論を踏まえて、自分の解をまとめなさい。</p> <p>14 自分の創った学習課題を班の学友に取り組ませる。班内の学習課題の中から一つを選ばせる。</p> <p>自分の創った学習課題の中からもっと面白そうなものを一つ選んで、班の学友に解いてもらいなさい。</p> <p>解き終わったら、4題の中からもっとも国語の学習課題として適切なものを選び、選ばれた人は、それを板書してください。他の人は、視写しなさい。</p>	14 活動の観察により。
	15 よい学習課題とはどのようなものか理解する力。	3	<p>15 よい学習課題について理解させる。</p> <p>よい学習課題というのは、その課題を解くことで作品がより分かるものです。私がずばりこれはよい課題というものに丸をつけてみます。これ、これ、これ、です。</p>	15 聞く態度の観察により。
	16 読みの目的を持って読む力。	15	<p>16 学習課題に答えながら読ませる。</p> <p>それでは、これらの課題を解きながら読んで、この「空中ブランコ乗りのキキ」の学習を終わりにします。今日は、1班、10班にお願いします。聞き読みです。</p>	16 活動の観察により。
	17 学習活動を振り返り自己評価する力。	2	<p>17 学習のまとめを行う。</p> <p>〈本単元での学習活動のエピソードを織り込みながら学習の振り返りを指導者が行う。又は指導者の朗読を聞かせる。次単元「トロッコ」学習の展望を語る。〉</p>	17 聞く姿勢の観察により。

#### 〈2008.3.5 修正〉

ア 「7 指導者からの学習課題2つに取り組ませる。」の課題2で、「丁寧に視写させる」ことにした。視写により表現への意識を高めるためである。

イ 「17 学習のまとめを行う。」では、「指導者の朗読を聞かせる。」を計画に入れた。指導者の朗読で作品を鑑賞させるためである。このアイデアは、三浦和尚『国語教室の実践知』（三省堂、2006、70頁）から得た。